

I 令和3年度の運営総括及び来期の課題

平成19年9月の開館から丸14年を迎えた。今日まで、述べ58万人を超える来館者が、白根児童センターを利用してくれた。今年度も引き続き「コロナ禍」の中、9月に2週間、1月～3月にかけて1か月半の臨時休館があった。7月頃から土日を中心に乳幼児親子が多く訪れ、『七夕ウィーク』、『ハロウィン』、『クリスマス会』、『ちびっこ豆まき』などの季節行事を楽しみに参加してくれる様子が見られるようになった。また、小学生達も同時期に児童センターに来館し始め、館内に賑やかな声が戻ってきた事を実感し、利用制限や大きな行事ができないもどかしさを感じながらもコロナ禍での最適な施設運営や行事の運営の仕方を試行錯誤しながらの運営する日々であった。

3密、消毒、換気の徹底がメインとなった現在は、新型コロナウイルスの影響で利用や行事が制限されているが、利用者が安心・安全に利用でき、子どもたち、保護者の気持ちにより一層寄り添い、居場所となれるような運営、地域との連携事業も可能な限りでの実施ができるよう次年度も努力していきたいと思う。

1. 乳幼児事業

(1) 総括

乳幼児親子の中には母親のみならず、父親や祖父母の姿も多く見られた。頻繁に足を運んでくれる親子も多く、来館するたびに子どもの成長を共に実感することが出来た。人数を集めて行う大きな行事の開催は難しいものがあったが、分散して参加できるような形式をとるなどしてコロナ禍に適した行事運営に努めてきた。南区の『子育てオーエンジャー☆みなみ』や『子育て安心ささえ隊 3739』の方々とも連携を取りながら、子育てをする母親支援にも努めた。また、BP講座の開催を通して、母親同士が情報共有できる仲間づくりにも焦点を当ててきた。

① ちびっこ広場

ちびっこ広場は月に1回、10時半から遊戯室で行っている。絵本の読み聞かせや手遊び、ミニ工作など、毎回、企画内容を変えて、親子で一緒に楽しんでいた。また、お誕生会も行うことで、その月の誕生日の子どもはもちろん、他の親子も一緒にお祝いをし、子どもの成長発見の場にもなっている。

② 季節行事

季節行事は例年だと人数を集めて大々的な開催だったが、今年は形式を変えて実施した行事もある。『七夕ウィーク』や『織姫と彦星を探そう』、『ハロウィンウィーク』では特定の日を決めることなく、分散して参加ができるように日程を設け、内容もセンター内に隠れているお題のものを探す等にし、参加者が密にならないように工夫した。県内での新型コロナウイルス感染者の人数が落ち着いている時期には『ちびっこ七夕おたの

しみ会』、『ちびっこクリスマス会』、『ベビーマッサージ』を例年より定員数を少なく募集し、開催した行事もあった。募集をすると早々に予約は埋まり、コロナ禍で児童センターだけでなく、様々な催し物が減少している今、利用者は行事を求めていることを再認識する機会となった。年度末に行った『手形・足形アート』では工作室に飾る壁面を作るための手形、足形を取らせてもらった。子どもの成長の記録として持ち帰ってもらうととても喜ばれた。

③移動児童館（カプラ遊び）

児童館をより広く知ってもらうために移動児童館を行った。昨年度に引き続き、諏訪木保育園を訪問。『カプラ遊び』は、フランス生まれの積み木を使って、平面での製作を多くしたり、立体での製作を多くしたりと月齢に合わせた製作を行い、カプラの楽しさを伝えた。

④『子育てオーエンジャー☆みなみ』の方々との共催事業

5月、7月に『ほっぺちゃんひろば』を2回開催した。「コロナ禍」であるという事もあって、親子さんの来館の様子を見ながら検討した。1回目は「オカリナとピアノの演奏」では親子で静かに演奏を聞きながら、癒しの時間となっていた。2回目は「ピアノ演奏と絵本の読み聞かせ」でピアノの伴奏と共に聴く絵本の読み聞かせはとても素敵だった。3月に実施予定だった「鷺尾助産師さんによる講話」は毎年人気な回だが、今年度は児童センターの臨時休館と重なってしまい、泣く泣く断念した。来年度も継続事業の予定である。

⑤その他

9月に新潟市政策企画部が主催で『パパママのまちづくり ワークショップ』を実施。ファシリテーターが進行の基、これからの新潟市がどのようになっていけば住みやすくなるのかについて考え、意見を出し合う機会となった。

(2) 来期の課題

母親支援と親子のふれあいを重点に、地域とともに講座や広場、数少ないながらも行事を執り行ってきた。休日を中心に、父親と幼児と一緒に来館する姿を多く目にする。行事や季節のイベントに、父親も一緒に参加する様子も見られた。利用者のニーズとしては行事の実施もあるが、日々の関わりに重点を置き、まずは親子の居場所づくりに努めていきたい。コロナの感染拡大状況をみながら、両親、祖父母の方々のニーズに耳を傾け、次年度の運営に活かしていきたい。

2. 小学生事業

(1) 総括

平日は、習い事や学校の帰りが遅くなり遊びに来館する子が少なくなっているが、核家族化で共働きが多く、子どもたちが日中を安心安全に過ごせる場として、児童センターが『第二の我が家』のように過ごす子どもたちの姿が少なからず見られる。

今年度は行事やクラブの活動を少しではあるが復活させたこともあり、昨年度よりは充実した事業ができたと思う。ボランティア事業も職員と一緒に季節の壁面を貼るお手伝いや、ハロウィン・クリスマス会の準備のお手伝い。ちびっこ広場のお手伝いなど、自分でも何か出来るという自信を身につけてほしいと願っての1年だった。子どもたちも役に立てる事が嬉しい様子で嬉々として臨んでくれていた。

①定例行事

アリーナが開放されている期間は毎月、『アリーナで遊ぼう』を開催した。ドッジボール大会、ドッチビー大会、新聞紙雪合戦など、親子行事と同様に定員を少なくしての実施だが、様々な競技に取り組んだ。チームプレーで仲間同士助け合ったり、全力で打ち込む様子などがみられる事も多かった。毎年恒例になりつつある、『児童センターをきれいにしよう』では多くの児童が参加し、一年遊んだ各お部屋の大掃除を行って一年を締めくくった。

季節行事の『七夕』と『ハロウィン』では今年度は「ウィーク」として密にならないよう1週間という期間を設けて行った。幼児親子から中学生まで幅広い年齢層の子が参加し、日ごとに変わるミッションを楽しんだ。『手形、足形アート』では幼児親子さん同様、手形や足形を取ったのだが、手の半分ずつ色を変えてみたり、手の形を変えて押してみるなど工夫をこらしていたのが印象的だった。

②クラブ活動

『ファンシークラブ』、『ハンドベルクラブ』、ハンドベルクラブは小学生からの要望もあり、二つのクラブ活動を復活させた。行事と同じく定員を少なくし、最低限の接触や密にならない人数、クラブ運営を心掛けた。

ファンシークラブは4年生～6年生9名が参加し、年4回実施の予定であったが、最後の2月の回は児童センターの臨時休館と重なったため、残念ながらの中止。「スライム」や「ハロウィンリース」、「紙粘土のクリスマスツリー」の工作を楽しんだ。

ハンドベルクラブでは6年生3名が参加し、季節に合った童謡を短い期間で練習をし、「ちびっこ七夕おたのしみ会」、「ちびっこ広場」、「ちびっこクリスマス会」で発表することができた。参加児童はクラブ休止前にも参加してくれていた高学年ということもあり、選曲や演奏パートを自分たちで話し合いの基、決定するなど成長を感じることもできた。そして自分たちが発表した後は、1ブースを担当するなどボランティアとしても携わり、会を盛り上げてくれた。

④その他

3月に劇団あかつきの皆さんにきていただき、『劇団あかつき 体験劇』を実施。

配役を自分で選択することから始まり、セリフや動きの練習をして練習、本番までを約2時間で行うという体験劇。ひまわりクラブの児童も参加し、劇団の衣装を借りて本物の劇さながらの体験をすることができた。

(2) 来期の課題

子ども一人ひとりの自主性・創造性、社会性、協調性を重視しながら、自分で自由に遊びを見つける手助けをしていくとともに、日々の子どもたちの様子を観察し、変化を見落とさないように、注意深く見守っていきたいと思う。また、日頃から保護者とのコミュニケーションをとることはもちろんのこと、地域の方々にも協力を仰ぎながら、多くの大人の子どもたちの成長を見守っていきたい。また、3密・消毒・換気に配慮しながら安心してのびのびと遊ぶことができるよう環境づくり、整備に努めたい。そして小学校やひまわりクラブとも情報交換をしながら、連携を密にしていきたいと思う。

3. 中・高生事業

(1) 総括

中高生の中には、開館当時から長年児童センターを利用している子どもたちが多く、職員との信頼関係も強く、職員と会話を楽しむ様子も見られる。部活動や習い事との兼ね合いもあり、中々行事ごとに参加することは少ないが、中高生タイム（6時から7時）では、アリーナでスポーツを楽しんだり、定期テスト前には、職員に勉強を教えてもらうこともあった。アリーナが中高生でいっぱいになるくらい、スポーツをすることが楽しみで訪れる子どもたちが多いのも児童センターの特徴だと思う。

「児童センターをきれいにしよう！」では、率先して小学生のグループ分けやボランティアとしての活躍をみせてくれた。頼もしい中高生の姿に感動すら感じた時間だった。

中高生にも『手形、足形アート』に参加してもらったのだが、意外にも乗り気で意欲的に参加してくれた。中高生ともなると手の大きさが際立ち、迫力すらあり、小さい頃から来館してくれている子たちはその成長ぶりを感じることができて感慨深かった。

(2) 来期の課題

アリーナが閉鎖している期間、体を動かす機会が少なくなる。また、利用できる部屋が制限されることもあり、中高生の『居場所作り』が課題になってくる。学校や部活動との兼ね合いも含めると中々行事参加が難しいため、できる限り子どもたちのニーズに応えていくことで、『居場所』としての役割を果たしていきたいと思う。

4. 地域との連携事業

①白根地区社会福祉協議会との共催事業

- ・今年度は「レクダンス」、「新春おたのしみ会」の共催していた行事は中止となってしまった。来年度こそは実施できることを願っている。

②白根ひまわりクラブ合同事業

- ・2ヵ月に1回「児童センター・ひまわりクラブ合同会議」を行った。こどもの情報共有を通して、お互いの連携を更に密にすることができた。
- ・例年夏休み期間中に「大運動会」を実施していたが、コロナ禍のため「ドッジボール大会」に変更し、実施計画を立てていたのだが、新規感染者が増大したため、直前で中止となってしまった。

③南区自治協議会との連携事業

- ・「ファミリーダンス教室」は昨年度まで実施できていたのだが、今年度は感染拡大のため中止。

④大学との連携

- ・新潟医療福祉大学から8月に2年生一人、3月に3年生が二人、敬和学園大学から11月に2年生が一人実習に来てくれた。コロナ禍のため数少ない中ではあるが行事の運営や利用者との関わりに重点をおき学びを深めてもらった。学生たちが企画立てた行事も実施し、中でも『カプラであそぼう』は幼児親子から中学生まで集中してカプラ製作を楽しんでいた。